



Title	類型学的に見たスラヴ語過去時制とブルガリア語パーフェクトの動向
Author(s)	石田, 修一
Citation	大阪外国語大学学報. 1988, 76(1-2), p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81196
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

— Претерит славянских языков в типологическом освещении и динамика перфекта в современном болгарском языке. —

Сюити ИСИДА

Как уже известно, в процессе развития системы прошедшего времени индоевропейских языков, в том числе славянских языков, наблюдается много общего.

Вообще говоря, перфект до сих пор стремился превращаться в аорист (*perfectum historicum*), т. е. универсальный претерит. При этом подобное направление всегда повторялось периодически в истории германских, романских и славянских языков.

Но болгарский язык, и вообще славянские языки на Балканах, упорно сохранял и сохраняет старую систему синтетических и аналитических претеритов. Бунина, И. К. убедительно доказывает в своей работе "История глагольных времен в болгарском языке" "устойчивость системы болгарского индикатива на протяжении всей истории болгарского языка от X — XI вв. до нашего времени" и показывает историческую неизменность форм и значений времени "в громадном большинстве случаев: от 88 до 90%".

Почему это так? В данной работе мы исследовали употребление всех форм перфекта в болгарском переводе романа советского писателя Николая Островского "Как се каляваше стоманата" [русский оригинал "Как закалялась сталь"].

В результате этого мы пришли к выводу, что такая "устойчивость" прежде всего зависит от сильной маркированности таксисной функции болгарского перфекта в отличие от русского языка, у которого, кроме деепричастий, нет маркированной граммы, указывающей на таксисную связь в предложении.

類型学的に見たスラヴ語過去時制と ブルガリア語パーフェクトの動向

石 田 修 一

序

印欧語の過去時制の形式の発達過程には一定の共通性が認められることは、すでにメイエ (Meillet, A) などによっても指摘されて来たところである。すなわち、例えば、今日の代表的な印欧諸語であるゲルマン、ロマンス、スラヴの各言語群においては、概して、古い総合形式型過去形—アオリスト (Aorist)、インパーフェクト (Imperfect) —が衰退消滅するか衰退傾向をもつ一方で、回説型のすなわち分析形式型のパーフェクト (Perfect) が意味的進化を遂げて古い総合形式過去形と同義化し、かつそれを駆逐して行く、という一般的傾向を指摘することができる。これは言語現象における弁証法であって、「過去」の把握形式システムの変化と発展の過程それ自体に普遍的法則性が観察される、ということを意味している。これを単純に言い換えれば、パーフェクトの変質とそのアオリスト化という傾向の普遍性である。

マースロフ (Маслов, Ю. С.) によれば、この普遍性には更に第一周期から第三周期に至る歴史的周期性が指摘できるという。つまり、第一同期においては古い印欧語の総合形式型のパーフェクトの変質とアオリスト化の完成、また第二周期では分析型パーフェクトの同一傾向の進展、そして第三周期では新たな改良分析型パーフェクトの発生と進化が観察される、という。まさにここには、パーフェクト進化の歴史は繰り返す、ともいうべき螺旋発展型の輪廻が存在するということになる。⁽¹⁾

ところで、一般にパーフェクト対非パーフェクトの対立の依って立つ基礎にあるものは、アスペクト性の区別ないしはタクシス性の区別であろう。⁽²⁾ また言語によってはその両者の性質を混在させながら対立を形成している場合が存する。それは言語によって様々であるが、その様々なパーフェクトのタイプの最大公約数を取れば、そこには時間軸における先行と後続という二つの要素の混在があることを指摘することができる。すなわち、その重心を後続面に移すか先行面に置くかによって状態 (結果) のパーフェクトが動作のパーフェクトに傾くのである。イエスペルセンが述べるように一般に「完了概念のもつ過去・現在の二つの面は安定した均衡状態に保っておくことが容易では

ない」のである。⁽³⁾ 勿論ある場合には、均衡が取られて包括的パーフェクト (Inclusive perfect) として機能する場合も存在している。⁽⁴⁾

さて、マースロフによれば、パーフェクトの歴史的発展は、原則として、状態のパーフェクトから動作のパーフェクトへという道程を辿ったのである。しかも、状態のパーフェクトは、原初的には「純粹」状態（先行動作に起因するのではない状態）を表わす語類、つまり動詞体系外にあって不活発な非能動的な肉体的、心理的状态を表わす特殊な語類、換言すれば一種の「状況詞」ともいうべきものから始まり、これが統語法上述語の役割を担うが故に次第に動詞的に傾斜したものであって、恐らくは当初は活用形をもたず、特にテンス別の変化もなかったが次第に動詞と接近してその体系中に組み込まれるに至った。しかも動詞体系に組み込まれるに当たっては、アスペクト面の語形派生的な体系としてではなく、「非動作動詞」類という語派生的な特別な動作態 (Aktionsart) のレベルにおいてであって、このような「非動作動詞」類こそ大部分の動詞を構成する「動作動詞」類に對置される形、すなわち「原始完了形」(Protoperfect) なのだ、という。「原始完了形」のその後の発展は各印欧語によって異なるが、大別すれば一つは状態動詞現在形に、もう一つは動作動詞のパラダイムに吸収されたのである。そして、例えばバルト・スラヴでは、それは状態動詞現在に変質、変形し、レスキーン (Leskien, A) 分類にいうスラヴ語第四類 b 動詞 (горить – горѣти 等)、⁽⁵⁾ やラテン語の第二種活用 (-ē 語幹) の状態動詞 (habeo – habēre 等)、ゲルマン語 (haben 等)、また所謂「過去現在動詞」(Praeteritopraesentia) ⁽⁶⁾ (古典ギリシャ語 αἶδω, 古スラヴ語 вѣдѣ 等) にその痕跡を残しているのである。「原始完了形」のもう一つの道は、真正パーフェクト化への道であって、このパーフェクトはもはや「純粹」状態ではなく先行動作の到達する結果としての状態を表わすようになり、テンスの意義特に「現在」の意義を得るに至った。これを基にやがてプルパーフェクト (Pluperfect) のようなパーフェクト群を作り出して行く。しかもパーフェクトはもはや別語としてではなく、動作動詞のパラダイムの一環として、すなわち同一動詞の形としての機能を得るに至るのである。

以上のようにして第一周期が開始されるとすれば、状態の表現 (原始完了語類) → 状態のパーフェクト → 動作のパーフェクト → 非パーフェクト的過去、というパーフェクト発達の一般的定式、すなわち状態のパーフェクトからアオリスト化に至るサイクルは概して同じようにどの周期においても繰り返される、というのである。第一周期については古典ギリシャ語や、ラテン語からロマンス諸語に至る総合形式のパーフェクトの意義、形態の発達の中に見ることができる。例えばラテン語においてもすでに形態的にはアオリストとパーフェクトは統一されていたと推定される (アオリストの標識 -s- をもつ *dic-s-i > dixi と、それとは異った vid-i, mon-u-i などの差)。したがって、この語幹構造の異なる二つの形を含むものをラテン語はパーフェクトと呼ぶが、これは本来的なパーフェクトとして機能する場合も (perfectum praesens と perfectum logicum すなわち状態のパーフェクトとしても動作のパーフェクトとしても)、アオリストとして機能する場合 (perfectum historicum) もある。一方インパーフェクト (Imperfectum) 対アオリストとしての perfectum historicum の対立は

今日のロマンス諸語に継承されるが、本来的なパーフェクトの意義は分析型のパーフェクトに取って替えられて行くのである。すなわち総合型であるラテン語パーフェクトの「完了」機能はラテン語の末裔たるロマンス語で枯渇し、それは単純な過去時制へ変ってしまっている。「完了」機能の枯渇したフランス語の単純過去 (passé simple) ないしは、定過去 (passé défini) と呼ばれる形式に変わって「完了」機能を更新すべく複合過去 (passé composé) が発生するが、口語におけるその動向はすでに第二周期的な経過を辿っていると考えられる。第二周期すなわち分析型パーフェクトの単純過去化 (アオリスト化) の過程は、ドイツ語の現在完了形 (Perfekt) の口語における動向⁽⁷⁾、また大部分のスラヴ諸語の過去形の起源にも観察される。すなわち今日の大部分のスラヴ語で過去形一般として使用される形は〔(存在動詞) + 能動完了分詞〕⁽⁸⁾ によるパーフェクトの形式の残滓であり、パーフェクト機能が枯渇したものである。特に東スラヴ諸語では存在動詞まで除去して能動完了分詞のみを過去形に変質させてしまっている。序でながら、第二周期的なパーフェクトの構成要素の面で観察されるスラヴ語の特徴は、概して所有動詞 (have, haben, avoir 等) や受動完了分詞を用いず、存在動詞 (быть 等 = be, sein, être 等) や能動完了分詞を使用することである。所有動詞と存在動詞を使い分けているフランス語やドイツ語と異なるのである。

第三周期と呼ばれる過程はどうであろうか。スラヴ語、特にスラヴ諸方言において顕著であると言われている。所有動詞型に二型、存在動詞型に二型、計四種類のタイプが認められるという。所有型では①У кого быть 型 (例 (ロシア語) У меня работа написана.)⁽⁹⁾ (cf. (ラテン語) aliquid mihi (apud me) factum est), ②иметь 型 (例, (チェコ語) Mám úlohu napsanou.) (cf. (ラテン語) habeo aliquid factum), 存在型では③, -(В)ши 型 (例, (ロシア方言) Он привыкши.), ④自動詞派生被動分詞型 (例, (ポーランド語) On był jechany.) (cf. (フランス語) je suis venu.)。またロマンス語においても、例えばフランス語の重複合過去 (passé surcomposé) もアオリスト化した複合過去を償う為の新しいパーフェクトだという (j'ai fait → j'ai eu fait)。

さて、過去時制の形式の発達面に見られるゲルマン、ロマンス、スラヴ語間の共通点と差異は如何なるものであるか。マースロフを補足しながら総括すれば以下ようになる。

すなわち、共通点として、①パーフェクトの意味的進化によるパーフェクト独自の意義の喪失、そしてより広い一般的意義の獲得ないしは他の過去形一般との同義化、②総合形式型過去形と、それと同義化した分析型パーフェクトという新旧同義対立の弁証法における前者の衰退、消滅化傾向と後者の保存、発展傾向、③ゲルマン、ロマンス、スラヴの各言語群内のいずれにおいても、古い総合形式型過去形の「消滅地帯」と「保存地帯」と中間的な「過渡的地帯」が共に存在することが指摘できる。

次に差異として次の諸点が考えられる。すなわち、①「消滅地帯」で消滅・衰退傾向をもつものは、ゲルマン語ではそこに一種のみ存在する総合形式型過去形、ロマンス語では二種類の総合形式過去形のうちアオリスト機能のものだけ (すなわちラテン語パーフェクトに遡るものだけで、インパーフェクトに遡る形はどのロマンス諸語でも保存される)、スラヴ語では二種類の総合形式過去

形（アオリストとインパーフェクト）の一方だけを廃用にして他を保存するものではなく、二種類とも消滅、②「消滅地帯」では、かつてのパーフェクトが唯一の過去形となるか主要な過去形となるか、また分析形式を保存するかその総合化を追求するか、の二者択一である。ゲルマン、ロマンス語は分析形式保存が原則であるが、概して南バルカンを除いてスラヴ語は分析形式パーフェクトの総合化傾向が強い。例えば、上述の〔存在動詞＋能動分詞〕の結合形式中の存在動詞部分の完全除去（ロシア語を含む東スラヴ諸語）や部分除去（例えばスロヴァキア語やチェコ語においては3人称のみ存在動詞を落す）、あるいは存在動詞現在人称活用語尾を能動分詞の後へ膠着する（ポーランドでは存在動詞活用形 *jestem, jesteś,* の語尾形態素を能動完了分詞 *-ł/-ła* につけて *czyta-ł-e-m, -ła-e-ś...* のように構成する。但し3人称では存在動詞語尾を省略して *czyta-ł* のようにする。尤もこの存在動詞語尾は動詞以外の他の語へ飛んで膠着することも可能である）、といった現象にスラヴの特徴が見られるのである。③「消滅地帯」と「保存地帯」の均衡関係は各言語群内において異なる。ゲルマン語では「保存地帯」が優勢であり、ロマンス語ではほぼ同程度に均衡しているという。スラヴ語では「消滅地帯」が絶対優勢である。スラヴ語については次の章で扱うので、ここでは、概して東、西スラヴ諸語（ソルブ語を除く）及び南スラヴ語のうちスロヴェニア語では、早期、完全に消滅が実現された、という指摘にとどめておきたい。

〔I〕ロシア語史における過去時制と現代スラヴ諸語における過去時制の体系

古いスラヴの過去時制の体系は、古典ギリシャ語などと同じくアオリスト、インパーフェクト、パーフェクト、プルパーフェクトの四種を含むものであったろうことは、古スラヴ語（古代教会スラヴ語）がこの四種を有することによって推定できる。特に古スラヴ語のアオリストの語尾形態素には、明らかに古い印欧語のアスペクト形態素と考えられるシグマ・アオリストのシグマ（*-s-*）が含まれている。⁽¹⁰⁾ スラヴに入ったこのシグマは、一定の条件下で、すなわち **i, *u, *r, *k* の直後に続き、しかも破裂音（*p, t, k*）の後続という防害要因がない限り、*s > h* に変り、*h* は更に所謂音節内同化法則の一環である口蓋化に服して前舌母音前に位置する時は *h > s'*（第一次口蓋化）に変わった為、古スラヴ語のアオリストの語尾においては、シグマは古典ギリシャ語のように一貫してシグマのまま現れることはなく、*s/h/s'* の交替（Gradation）をもって現れるにすぎない。⁽¹¹⁾。そしてこの交替は極めて強い生産性をもっていた為、以上のような条件外にあった別型のアオリストにまでアナロジーが作用して一般化している。古代ロシア語は勿論のこと、今日アオリストを残すスラヴ語は以下に見るように少数派ではあるが、アオリストを残す限りは、大かれ少なかれこの交替のいずれかの部分を残している。例えば、セルボ・クロアチア語ではこの交替のすべてを残し、ブルガリア語は *h* のみを残している。⁽¹²⁾

インパーフェクトの接辞は *-eah* であるが、この形態の起源についてはいくつかの仮説があって未解明である。いずれにしても「シグマ・アオリストの強い影響下に発生したもの」⁽¹³⁾ であろうと言

われている（インパーフェクトの活用語尾にもアオリストと非常によく似た $h > s'$ の交替が見られる。勿論，第一次口蓋化による交替である）。

以上，アオリスト，インパーフェクトは総合形式を取るが，パーフェクトとブルパーフェクトは，存在動詞に能動形動詞過去第二形（-l 分詞）と呼ばれる要素を合成する分析形式を取っており，この点では古典ギリシャ語やラテン語とは異っている。唯，古スラヴ語にも文語的な古代ロシア語にも総合形式のパーフェクトの残滓が見られる（例， $\alpha\delta\alpha > \text{вѣдѣ}$ ）ことは〔序〕に記述した通りである。

東スラヴの古語であった古代ロシア語はどうであったのか。文語面では古スラヴ語と深い繋がりをもって結びついて来た古代・中世ロシア語が十七世紀に至る迄，古いスラヴのアオリストやインパーフェクトを根強く保存して来たことは種々の研究の指摘するところであるが，これは例えば次の資料によっても凡そ察することができる。⁽¹⁴⁾

文 献 種 類	アオリスト		インパーフェクト		パーフェクト	
	総 数	%	総 数	%	総 数	%
古スラヴ語文献	5964	77.5	1376	17.6	376	4.9
ラヴレンチー年代記	7700	82.2	1200	12.8	463	5.0
17世紀文献	4895	80.3	447	7.3	753	12.4

しかし，東スラヴの実際の口語はどうであったのか。科学アカデミーが手がけたボルコフスキー（Борковский, В. И.），クズネツォフ（Кузнецов, П. С.）の「ロシア語歴史文法」，同じくクズネツォフの「ロシア語歴史形態論概説」は概略次のように述べている。「最も初期の古文書類（грамота），例えば『ロシア法典』（1282年）でもインパーフェクトは見出し得ない」⁽¹⁵⁾（この文献は普通非常によく実際の口語を反映したものと考えられている）。更に，インパーフェクトの消滅時期に関しても『原初年代記』におけるインパーフェクトの首尾一貫した使用は，この原本が書かれた時期にはインパーフェクトは実際の生きた形であったことを示している。従って，その消滅は最低十二世紀初頭以後である」⁽¹⁶⁾（『原初年代記』の原本は十二世紀初頭に編まれたものであるが，上表中のラヴレンチー年代記（1377年）に残るものが最古の写本である）。また，「恐らくインパーフェクトが真先に消滅する。……アオリストの消滅はそれ以後である。インパーフェクトを全く見出し得ない文書類（грамота）にもそれを見出すからである。……アオリストの消滅は古代ロシアのすべての方言において同時に発生したのではなく，先ず南部において，のち北部，特にノヴゴロド及びノヴゴロド人が植民した地域へ広がったのであるが……13～14世紀のノヴゴロド文献のいくつかの事実は，アオリストの消滅開始と往時の名残りを告げており，実際の口語の状態を反映していない」，あるいは「現代ロシア語には古いインパーフェクトの如何なる痕跡も見出し得ない」が，アオリストではいくつかの残滓がある，とするのである。⁽¹⁷⁾

したがって以上の理論が想定する，東スラヴにおける総合形式過去形の消滅過程には，インパーフェクト（12世紀初頭以後）→アオリスト（南部）→アオリスト（北部，13～14世紀）ということになる。この解釈は伝統的で，しかも非常に権威をもったものと考えられている。しかし，最近ガ

ルシコーヴァ (Горшкова, К. В.), ハブルガーエフ (Хабургаев, Г. А.) は、その共著「ロシア語歴史文法」の中でこの伝統的解釈に再検討を迫っている。同著是最古のロシアの文献資料を検討してみれば、古代ロシア方言におけるアオリストやインパーフェクトのより長期の保存とかより早期の消滅とかを推定する根拠はない、とした上で概略次のように述べている。「アオリストもインパーフェクトも、これらが本来もっていた時制の意義では、すでに12世紀までに東スラヴ語の実際の口語には存在していない。12世紀の非文語的なテキストにおいては、アオリストの意義は完了体または（それよりは稀であるが）不完了体から作る-II形、（すなわち能動完了分詞形——石田）によって表わされており、またこれらのテキスト中にアオリスト形が見られたとしても、その形自体はこの文書の書き手たちがこの形を知っていたことを証明するにすぎないのであって、そのどの場合をとっても一つたりとて純粋なアオリストの意義をもって使われているものはない。一方、インパーフェクトも東スラヴの地にあっては如何なる伝統ももち得ず、しかもかなり早くからインパーフェクトの機能は、-ыва-л/-ива-лの形との相関性を示している。実際の古代ロシア語の時制形としてのアオリストの存在（12世紀以前？）は（現代ロシア語の痕跡からして）疑えないとしても、インパーフェクトの形は例え文献以前の東スラヴ方言であれ、その存在は立証し得ない」と言い切っている。

両著者はこの主張を例証する為に「ノヴゴロド自樺文書」や「ロシア法典」を含む12—14世紀のスモレンスクやノヴゴロド等の古文書、古文獻類におけるアオリストやパーフェクトを具体例によって検討して、アオリスト形がパーフェクトの意義で、また逆にパーフェクト形がアオリストの意義で使用されていることを示し、これらの事実はノヴゴロド方言に進行したアオリストの崩壊過程を示すどころか、逆にこれらの古文書の編纂者がアオリスト形を本来のアオリストの意義では、すなわち「現在」とは切り離された完全に「過去」に関係する動作、状態を表わす形だ、という意識をもって使用したのではないことを反映したものだ、としている。つまり形式は存在してもアオリストの機能、意義は変質していた、とするのである。インパーフェクトについても、クズネツォフが「12世紀初頭以後消滅」説の根拠とした、まさに「原初年代記」また「ノヴゴロド年代記」に、接辞 -(ы/и)-ва- を挿入したインパーフェクトの形（例、умык-а-ху→умык-ива-ху）が活発に用いられること自体、この接辞をもたない形におけるインパーフェクトの意義の衰退を示しており、その衰退、消滅過程にあった意義をこの新たな接辞によって維持、更新しようとしたことの証拠である、そしてこの形は更に -(ы/и)-ва-л の形とも相関し乍ら次第に活発化して行く、というのである。

また、ガルシコーヴァ、ハブルガーエフは、本稿〔序〕に述べた第三周期的な「新しいパーフェクト」《новый перфект》についても語っている。それによれば「新しいパーフェクト」は、東スラヴ語の実際の口語では、すでに遅くとも12世紀以前に出現していた、とされる。ここに言う「新しいパーフェクト」とは、〔序〕に述べた存在型③（Он уехавши 型）、すなわち能動完了分詞第一形からの派生形（不変化形）を指している。これについて次のように述べている。

「長い間『新しいパーフェクト』は、大ロシア語の北西部方言の特徴と見なされて来たが、最近の研究では、南ロシア（最古の東スラヴ人居住地域。現代の方言区分で言えば、西部方言、南西部方言）やその他の東スラヴの地域を含めて、大部分の大ロシア方言に拡がったものである。古代ルーシの地域を考慮して言えば、『新しいパーフェクト』はロストフ・スズタリ地域とそのコロニーにだけは見られない（ロシア標準語が『新しいパーフェクト』をもたないことも、その規範がモスクワ方言の影響下で形成されたことによって説明できる）。この現象の等語線は北東部方言地帯の独立時期、すなわち約11～12世紀末頃から拡がって来ている方言特徴の多数の等語線と一致する。従って言語地理の資料からして、東スラヴにおける、古いスラヴの過去時制の再編過程は12世紀以前に完了していた、という結論に達する」というのである。¹⁸⁾

従来、古文献中に使用されるアオリストとインパーフェクトの形の相互混同の例証を通じて（形態的に近似する部分があるため）、その頻度や形だけで、その消滅過程の確認が為されて来たのに比べて、表面上の形と実際の使用意義の同一性の如何を再検討したガルシコーヴァ、ハブルガーエフの研究はより説得性、信頼性が高い、と考える。

この分析が正しい、とすれば、東スラブにおける過去時制の体系の発達において、古スラヴ語の伝統を引き継いだ文語（アオリスト、インパーフェクトの17世紀後半に至る迄の保存）と実際の口語における（12世紀以前における崩壊）との間には、あまりにも大きな落差が存在した、ということになる。しかし、まさにこの故にこそ18世紀に至ってのロマノーフの三文体論等による国語改革運動が必要だったのである。

さて、現代スラヴ諸語における直接法過去の組織構成を総括すれば次のようになる。

語 群	語	Aorist	Imperfect	Pluperfect	Perfect
東スラヴ	ロ シ ア	—	—	—	[+]
	ウ ク ラ イ ナ	—	—	[+]	[+]
	白 ロ シ ア	—	—	[+]	[+]
西スラヴ	ポーランド	—	—	(+)	[+]
	チ ェ コ	—	—	(+)	[+]
	スロヴァキア	—	—	+	[+]
	ソ ル ブ	+	+	+	+
南スラヴ	スロヴェニア	—	—	+	[+]
	セルビア・クロアチア	(+)	(+)	(+)	[+]
	ブルガリア	+	+	+	+
	マケドニア	+	+	+	+

左の表のプラス、マイナス表示は当該の形の有無を示している。また〔 〕は、その本来的な意義、機能を失って、変質してしまっていることを、() は、稀用ないしは、強い文語化傾向をもっていることを示している。

以上から、東スラヴ語群、およびソルブ語を除く西スラヴ語群、南スラヴ語群のうちスロヴェニア

語におけるパーフェクトのプラス表示は、起源的にのみパーフェクトであることを指し、したがって、過去形一般に変質してしまっていることを指している。それ故に、東、西スラヴ語群におけるパーフェクトのプラス表示は、ソルブ語および南スラヴ語群におけるパーフェクトのプラス表示とは異っている、ことを断っておかねばならない。¹⁹⁾

〔序〕において述べたように、ロシア語を含む東スラヴ諸語においては、古い分析型パーフェクト〔存在動詞現在活用形＋能動形動詞過去第二形（-I-分詞）〕²⁰⁾における存在動詞部分の完全除去によって、能動形動詞（能動完了分詞）のみを残して、これを過去形一般として用いるようになったものがある。また、ソルブ語を除く西スラヴ諸語においては、存在動詞の部分的除去（3人称単数、複数のみ）を行って、過去形一般として代用している。また、南スラヴ諸語のうち、スロヴェニア語は、存在動詞を除去せず分析形式を完全に残している（単数、複数以外に双数をもち、すべての数、人称において存在動詞を残す）。ただし、これも本来のパーフェクトではなく、過去一般の形にすぎない。セルボ・クロアチア語は、過去四形を残してはいるが、パーフェクトの形は一般に、特に口語では、ほぼ過去一般として用いている。ソルブ語、ブルガリア語、マケドニア語は、根強く過去四形を残している（なお、ソルブ語は双数活用を有する）。また、ウクライナ語および白ロシア語のブルパーフェクトは、過去以前の過去を指すという本来の意義を失い、むしろ後続行為によって中断ないしは解除されたそれ以前の行為の表現機能へと変質している。ロシア語も、この意義ではブルパーフェクトを持つが、それはすでに文法形式ではなく、小詞にってしまった存在動詞の能動完了分詞中性単数形（было）を動詞過去形につけて表わす回説形式である（勿論これは古いブルパーフェクトの文法形式の残滓である）。東スラヴにおける、このブルパーフェクトの変質した意義は古代ロシアにすでに現れている。

なお、ブルパーフェクトの形式は、古スラヴ語においては、原初的には、①存在動詞のインパーフェクトないしはインパーフェクト幹アオリストに能動過去分詞（-I-分詞）を合成したが、のち、②存在動詞のパーフェクト形に-I-分詞を合成する形、に変わっている。古代ロシアでは文語を除いて概して②の形式を用いる傾向があったが、今日のスラヴ諸語は、①、②どちらかの形を用いている。東、西スラヴとスロヴェニア語は②型を、南スラヴは①、②型を併せもつもの（セルボ・クロアチア語）と①型だけのもの（ブルガリア語）とがある。ソルブ語も①型のみである。

さて、上表に見られるように、スラヴ語過去時制の体系は、概して三類型に分かれることが判る。マースロフは、ソルブ語（高地及び低地ソルブ語）は別にして、これらを、(1)北部型（アオリスト不在型）、(2)南バルカン型、(3)セルボ・クロアチア型に分けて考えている。すなわち、(1)北部型には、東スラヴ諸語の全てと、ソルブ語を除く西スラヴ諸語および南スラヴのスロヴェニア語が含まれる。ここでは、アオリスト対インパーフェクトの対立、またパーフェクト対非パーフェクト（perfectum対infectum）の対立は見られない。スラヴ共通のかつてのパーフェクトは過去形一般に変質、再編され、ブルパーフェクト形は形式的に存在しても、その使用は随意的であったり（すなわちパーフェクトで代用されたり）あるいはブルパーフェクト本来の意義を失って転義してしまっているのであ

る。

この北部型に対置されるのが(2)南バルカン型であり、ここでは古い複雑な過去時制組織をすべて最大限に残しており、これにはブルガリア語とマケドニア語が属している。これらは、アスペクト対立(完了体対不完了体)に加えて、アオリスト対インパーフェクトの対立, perfectum 対 infectum の対立を有し、更にこれに「直接法」対「伝聞法」(переизказно наклонение)(ある事実について話者が自分自身の見聞によらない事実として、非証人的立場を意識して伝達する法)の対立が錯綜し、更に、ブルガリア語では推定を根拠に話者が自分の判断を伝達する時に使う「推定法」(предположително(умозаключително)наклонение)が加わるため、動詞組織の複雑さは他に例を見ない。

次に、北部型と南バルカン型のちょうど中間に位置するのが、(3)セルボ・クロアチア型である。構造的には、最大値の過去時制形を有して、インパーフェクト対アオリスの対立, perfectum 対 infectum (あるいはパーフェクト対アオリスト)の対立を具備しているが、現実には、アオリストもインパーフェクトも随意的で、古いパーフェクトが過去形一般として使用され、それは次第に他の過去形を駆逐しつつあるのである。

さて、イエスベルセンは、ラテン語の過去形について語ったラテン文法家の言葉を引用して、「完了は話を進め、未完了は話を押しとどめる」(“Perfecto procedit, imperfecto insistit oratio.”)と述べている。「アオリストは話を運んで行き、『それから』何が起ったかを伝えるが、未完了は『その当時』のありのままの状態に低徊し、多少の冗長さをもってそれを敷衍する。前者は運動を、後者は休止を与える時制なのである」と解説している。²¹⁾

マースロフも、ラテン文法家に倣って、スラヴ語圏のアオリスト、インパーフェクトの消滅、保存、中間の各地帯で、すなわち、北部型、南バルカン型、セルボ・クロアチア型では、上記のような本来的なアオリスト、インパーフェクトの意義がどのように実現されるのかを考えている。ただし、物語文(小説)に限って扱う、という意味で oratio をもう少し狭義に言い換えて、narratio に、また、ここで言う perfectum は、アオリスト機能の perfectum historicum であるので Aoristum に替えて、“Aoristo procedit, imperfecto insistit narratio.”(アオリストは話を進め、未完了は話を押しとどめる)と変形している。これは、アオリストとインパーフェクトの意義を原理的に表現した訳であるが、この、話を進行させ、押しとどめ、あるいはまた逆行させる意義を、すなわち行為の順次性と同時性そして逆行性の意義、機能を、上の三型のスラヴ語がどのように担っているか、を表現すると次のようになる、という。²²⁾ すなわち、

- (1) Praeterito perfectivo procedit, praeterito imperfectivo insistit narratio.
- (2) Aoristo procedit, imperfecto insistit narratio.
- (3) Aoristo vel perfecto perfectivo procedit, perfectum imperfectivo(rarissime imperfecto) insistit narratio.

上の(1), (2), (3)は、それぞれ北部型、南バルカン型、セルボ・クロアチア型である。すなわち、

南バルカン型では、イエスベルセンが引用したラテン文法の定式が最も純粋な形で現れる、のに対して、北部型では、完了体過去形 (Praeteritum perfectivum) がアオリスト機能を担い、不完了体過去形 (Praeteritum imperfectivum) がインパーフェクト機能を担うのである。また、セルボ・クロアチア型では、アオリストないしは完了体パーフェクトがアオリスト機能を、不完了体パーフェクトが (極めて稀にはインパーフェクトが) インパーフェクト機能を担っている。というのである。この定式には、上にいう逆行機能についての言及が含まれていないが、これを含めれば下表のようになる。尤も、この定式は、すべての使用状況をカバーするものではあり得ないことは勿論である。

ラテン語	Perfectum (historicum)	Imperfectum	Plusquamperfectum
南バルカン型	アオリスト	インパーフェクト	ブルパーフェクト
セルボ・クロアチア型	アオリスト 完了体パーフェクト	不完了体パーフェクト (稀に、インパーフェクト)	ブルパーフェクト パーフェクト
北部型	完了体過去	不完了体過去	ブルパーフェクト 完了体・不完了体過去

概して、アスペクトの発達が、「消滅」に代替していることが判るが、しかし、南バルカンでも、アスペクトの発達が無い訳ではなく、この点が問題点として残るが、これについては次の〔Ⅱ〕において考えて見たい。

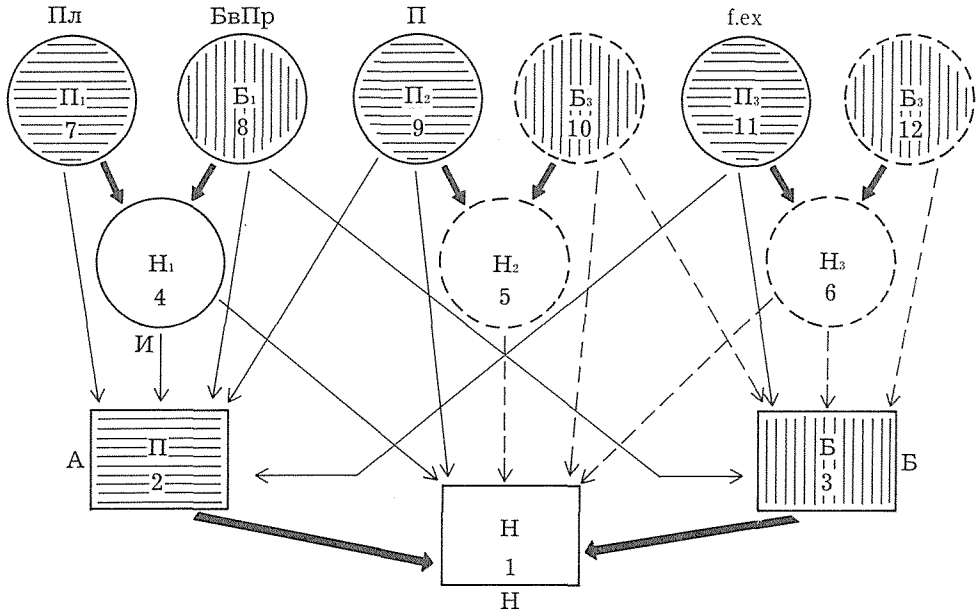
〔Ⅱ〕ブルガリア語パーフェクトの動向

(i)自然言語を離れて、概念的にのみ時階ないしは時序とも言うべきものを設定するとすれば、イエスベルセンが提起したような図式が、まず考えられる。⁽²³⁾ すなわち、時間的連続体を直線によって表示して、過去 (past), 現在 (present), 未来 (future) の基点を取り、次いで過去と未来をそれぞれ基点とする時の前後に、更に過去以前 (before-past), 過去以後 (after-past), 未来以前 (before-future), 未来以後 (after-future) を設定するのである。そして、以上のような仮の概念的名称に相当する文法的名称として、すなわちテンスとしては、前過去 (ante-preterit) — 過去 (preterit) — 後過去 (post-preterit) — 現在 (present) — 前未来 (ante-future) — 未来 (future) — 後未来 (post-future) を想定区分することができる。

こうした概念図を更に厳密に構想し、絶対時制と相対時制の体系を区別して考えたのが、ブーニナ (Бунина, И. К.) である。すなわち、発話時 (момент речи) を基点 (момент отсчета) として、それ以前と以後の時階を設定する絶対時制体系に加えて、その絶対時制体系に従って設定された任意の時階を基点として、それ以前とそれ以後の時階を区別する相対時制体系を、次のような図で表現している。

下図においては、線條の有無は基点となる時階の不一致という特徴における有標性、無標性を表わしている。すなわち、「過去か非過去か」の特徴について、あるいは「未来か非未来か」の特徴についての有標性、無標性を表わしている。前者の特徴の有標性は横線で、後者の特徴の有標性は

従線で表わし、線条のない時階はこれらの特徴において無標であることを表示している。更に、相対時制体系と絶対時制体系との関係は、細い矢印によって、また各絶対時制内、相対時制内の相互関係、すなわち、「過去・非過去」、「未来・非未来」の特徴による各時階間の関係は太い矢印で表示される。かつ矢印の方向は常に有標から無標の方へ向っている。



上の図のうち、ブルガリア語直接法は点線で表示された時制、すなわち、相対時制の第二、第三現在 (H_2, H_3) および第二、第三未来 (B_2, B_3) の4時制を欠いているから合計8時制の形式を有することになる。すなわち、A=アオリスト (Аорист) ; Н=現在 (Настоящее время) ; Б=未来 (Будущее время) ; И=インパーフェクト (Имперфект) ; Пл=プルパーフェクト (Плюсквамперфект) ; БвПр=過去未来 (Будущее в прошедшем) ; П=パーフェクト (Перфект) ; f.ex.=未来完了 (futurum exactum) の8時制である。⁽²⁴⁾

ブルガリア語のこうしたテンス組織の枠組は、古スラヴ語 (古代ブルガリア語) の時代から今日に至る迄維持されて来ており、他のスラヴ語が概ね複雑なテンス組織をアスペクト組織との均衡関係を再編しながら、簡素化して来た事情と比較すれば、ブルガリア語は極めて旧守的であるということになる。更にこの言語の動詞組織の複雑さは後で現れる伝聞法の参入によって、一層顕著なものとなっている。尤もブルガリア語のこうした8種の区別が、純粹にテンスの別であるのか、一種のアスペクトを包含した体系と見るかは、これまで多くのスラヴ学者の論じて来たところであるが、ブーニナはテンス体系の中で把握している学者の一人である。

ブルガリア語は、名詞、形容詞等所謂実詞 (substantive) 面では曲用を廃止して分析性を増大させて来たのに対して、動詞組織面では全く逆に総合性を保持するか、複雑な分析方式を採用している。したがって、スラヴ諸語の中では特異な存在であると言える。この複雑さは、とりわけ「過去」

に関係する体系に集中している、と考えられる。

さて、ブーニナの上図では、アオリストは絶対時制組織の「過去」を、インパーフェクトはアオリストを基点にした「現在」、すなわち「過去」の「現在」、パーフェクトは相対時制の表わす「現在」を基点にした「過去」となっている。パーフェクトの位置づけは、後述するようにブーニナの特徴と考えられるが、アオリストとインパーフェクトの配置は、マースロフとも符合するし、フランス語時制組織について語っておられる川本茂雄氏の解釈とも近いと考えられる。⁽²⁵⁾ 川本氏は、時間軸において、「これから実現する部分を α で、すでに実現した部分を ω で表わす、とすれば」、現在は α と ω を統合する視点 ($\alpha + \omega$) において捉えられ、「単純過去形と半過去形の対立は、双方ともに過去に属しながら、前者は α 、後者は $\alpha + \omega$ の特質を帯びることによって対立することになる」とされているのである。

(iii)ブーニナは、10～11世紀の古スラヴ語のグラゴール文字写本である「ゾグラフオス」(Codex Zographensis)、「マリア」(Codex Marianus)、「アッセマーニ」(Codex Assemanianus)の各写本、およびキリル文字写本である「サバ本」(Саввина книга)の4福音書、中世ブルガリア語の「ブラツァ福音書」(Врачанско евангеле)，そして現代ブルガリア語訳(19世紀と20世紀)の二つの福音書に使用されるブルガリア語直接法の時制の頻度を綿密な手続きと約束を経て、統計、比較している。そして、10～11世紀から今日に至る迄、ブルガリア語の時制体系には、何ら基本的変動は発生しておらず、この間重要な変化はあってもそれは音韻、形態面のものであって、「記号の意味」そのものに関わるような、つまり根幹に触れるようなものではなく、あくまでも体系の枠内で発生した変化にすぎない、と語っている。「10～11世紀から今日に至る迄の文献に記録される、ブルガリア語の全歴史を通じて、ブルガリア語直接法の安定性は……確認できる」⁽²⁶⁾ どの年代のどの版のどの翻訳においても、福音書テキストの同一個所で88%から90%という圧倒的多数の場合に……比較底本として使用したマリア写本の原本と同じ時制形ないしは同じ時制形の同じ意味の通時的ヴァリエーションが使用されている」にすぎない、のである。⁽²⁷⁾ そして、ブーニナの研究をパーフェクト面だけに限って概観しても、この時制の出現率は古スラヴ語写本から20世紀本へと時代順に見て、約1.4→3.5%前後への変化であり、[I]に見た東スラヴにおける出現率変化とは異っているのである。⁽²⁸⁾

このように動詞時制組織において、極めて旧守性の強いブルガリア語の現代のパーフェクトが、どのような展開を見せるのか、という問題意識のもとに、筆者自身が、ニコライ・オストロフスキー(Николай Островский)の「鋼鉄はいかに鍛えられたか」(Как закалялась сталь.)のブルガリア語訳(Как се каляваше стоманата. София. 1973. Народна култура)を底本として、⁽²⁹⁾ そこに用いられるパーフェクトをすべて検索した結果について、以下に報告する。以下「鋼鉄」のように省略する。

その際、マースロフのパーフェクトについての解説を参考にしながら分類、統計を行った。しかし、このマースロフは、パーフェクトの定義において、ブーニナとは微妙に異っているため(本稿

ではこの差異について細かく吟味することは出来なかったが) 簡単に整理しておきたい。

まず第一に、ブーニナは、パーフェクトを絶対時制の体系においてではなく、プルパーフェクトや未来完了と同じく、パーフェクト・グループとして相対時制組織の中に位置づけたことである。⁽³¹⁾ 第二に、「パーフェクトの主要な意義は、現在形の表わす行為に対する先行性の意義であり」⁽³¹⁾、「結果の意義」(результативное значение) および「行為の結果の現実性の意義」(значение актуальности последствий действий) を認めないことである。

「『結果の意義』の担い手は、時制の形態素ではなく、動詞語幹である」、とする。⁽³²⁾ 「『行為の結果の現実性の意義』も亦」「動詞語幹のもつアスペクトの意義に起因する複合的意義の一つにすぎない」のであり、「現在と過去の行為間のあり得べき関わりの一つにすぎない」という。⁽³³⁾

すなわち、発話時現在とは異り、現在形が可能な、作品中の「現在」の期間に対する先行性の表現をその職能としているが、それは常にその先行面の行為との繋がりの中で、先行面の行為に関係して、それを説明するために用いられるのである。⁽³⁴⁾ 「古スラヴ語においてもブルガリア語においても、パーフェクトがアオリスに対立するのは、現在期間の状況あるいはその期間内の個々の行為と、過去の行為の繋がりの特徴を直示する時制形としてである。他のすべての過去の相対時制の形と同じく、行為の繋がりの特徴を直示する有標項として、アオリストに対立するのである。唯、インパーフェクトやプルパーフェクトや過去未来形とは異なり、過去の行為と過去期間内の状況との繋がりではなく、現在期間内のあるいは現在時の状況との繋がりを示すのである」というのが、ブーニナの一貫した主張である。⁽³⁵⁾ したがって、パーフェクトの使用の動機は、作品全体、テキスト全体との関連の中で繋がっている意識との関係である場合もあり、パーフェクトの検証には本来は大きなテキストが必要なのである。

しかし、この第二の点に関連したブーニナの一連の主張も、マースロフが全く否定している訳ではない、と考えられる。それは、次のようなマースロフの定義に伺えるが、唯重点の置き方は異なるようである。すなわち、①過去の結果として現れる現在の状態(状態のパーフェクト)、②現在にとって、いろいろな点で現実的な事実としての過去の行為の確認(行為のパーフェクト)、③少なくとも現在との関連で言及される過去の事実(タクシ的意義、「前現在」の意義)、としている(この③は1956年版にはない)。⁽³⁶⁾

さて、前述の「鋼鉄」に用いられるパーフェクトは、以下のような頻度をもって現れている。連続的物語文と直接話法の別、不完了体と完了体の別、その他大きな意義、機能別に分類したのが以下の表である。() 内の数は、補語的従属文の内数である。

意義・機能	文種類	不完了体		完了体		総数	
事実確認等	直接話法	A 35	48	A 138	178	173	226
	物語文	B 13		B 40		53	
従属文中	直接話法	C 14 (10)	34 (20)	C 65 (34)	97 (60)	79	131 (80)
	物語文	D 20 (10)		D 32 (26)		52	
継続等	直接話法	E 27	34			27	34
	物語文	F 7				7	
内言 (モノローグ)	単文	G 6	6	E 23	29	29	35
	従文			F 6		6	
その他	直接話法		2	G 2	2	2	4
	物語文	H 2				2	
総数	直接話法	82	124	234	306	316	430
	物語文	40		72		114	

以下に、不完了体（A～H）、完了体（A～G）に取った例文を少数だけモデルとして挙げる。

〔不完了体〕

- A. 1. – Ами чували ли сте за Будановския колхоз ? – Аз съм ходил в Будановска.
(P.335), (ロシア語) А про Будановский колхоз вы знаете? В Будановске я был.
2. Ти виждал си го? (p.380), (□) Ты его видел ?
3. Познам го, живял съм с него в една къща. (p.83), (□) Этого я знаю, с ним вместе жил в одном доме.
4. Не сте ли следовали партийно-политически школи ? (p.416),
(□) В партийно-политических школах не были ?
5. Лекарите са писали за мене. (p.413), (□) Врачи там написали обо мне.
6. Спомняте ли си, аз съм ви молил винаги да говорите откровенно с мене. (p.402)
(□) Помните, я просил вас всегда говорить со мною откровенно.
- B. 7. Той е замаскирал следите си, а е вървял право към гората. (p.321),
(□) Он не запутывал свой след, а шел прямо к лесу. 下線以外は完了体。従って、
ここの例としては е замаскирал は入らない。以下同じように示す。
8. Ето тук, на тоя широк площад, са се задушавали в примките Валя и другарите
и. (p.226), (□) Вот здесь, на этой просторной площади задыхались в петлях

Валя и его товарищи.

C. 9. Аз също мога да измисля, че той се е занимавал с контрабанда. (p.387),

(□) Я тоже могу выдумать, что он контрабандой занимался.

10. Ти мислиш, че не знам кой е могъл да извърши такава мръсотия. (p.8),

(□) Так ты думаешь, я не знаю, кто мог сделать такую подлость.

11. Арестуваха ме, защото съм ходил из града след осем часа. (p.132),

(□) Меня арестовали за то, что я шел по городу после восьми часов.

12. Трябва само да се съжалява, Павел, че тоя разговор става три години по-късно от деня, когато е трябвало да стане. (p.382), (□) Остается пожалеть, Павел, что этот разговор происходит через три года после того, как он должен был произойти.

D. 13. В града няма нито един район, дето те да не са говорили на събрания. (p.358)

(□) Нет ни одного района в городе, где бы они не выступали.

14. Му се струваше, че е било вчера. (p.325).

(□) Кажется, что это было так недавно.

15. , че Снегурко признал че е вършил комунистическа пропаганда. (p.186),

(□) , что Снегурко признал, что вел коммунистическую пропаганду.

E. 16. Наистина аз никога в живота си не съм строил при такава обстановка. (p.255)

(□) Я в своей жизни никогда не строил в такой обстановке.

17. Ех, колко пътн съм искал неприятности зарад тоя мой език ! (p.123)

(□) Эх, сколько раз я неприятности имел за свой язык !

F. 18. Жухрай, матросът, неведнъж е разговарял с нас. (p.375)

(□) Жухрай матрос, с нами не раз разговаривал.

G. 19. Да какъв дявол съм се разприказвал с тая чудачка. (p.63),

(□) Какого лешего я с этой чудачкой разговорился.

[完了体]

A. 20. Колко сте пораснали? Помня ви като дивичко момче. (p.306)

(□) Как вы выросли! Помню вас дикарем мальчиком.

21. Всички цитати съм си записал на листчета. (p.361)

(□) У меня все цитаты выписаны на карточках.

22. Какво ги е довело тук в разгара на занятията в университета? (p.358),

(□) Что привело их сюда в разгар занятий в университете?

23. Аз съм се захванал с добро дело, а ти...(p.158)

(□) Я за хорошее дело взялся, а ты...

24. Учителският съвет е решил да раздаде на седми класе дипломи за завършено образование. (p.109), (□) Школьный совет решил выдать седьмому классу аттестат об окончании.
25. Тъи са ми омръзнали тези алгебра и геометрия! (p.109),
(□) Мне так надоела эта алгебра и геометрия.
- В. 26. Срещу ревкома се е расположила рота със специално назначение. (p.150),
(□) Напротив ревкома разместились рота особого назначения.
27. Изглежда, майка му е запалила печката (p.196),
(□) Мать, видно, натопила печь.
28. Всичко наоколо му е познато, нищо не е изменило. (p.278)
(□) Все кругом знакомо, ничто не изменилось.
- С. 29. Тя едва не каза, че е забравила книгата край езерото. (p.67),
(□) Она чуть не сказала, что книга забыта у озера.
30. Не знаех, че са те хванали. (p.122),
(□) Я не знал, что тебя забрали.
31. Пишеш ли, че заедно със семейството си си се престил от Шепетовка в Казатинското депо. (p.400), (□) Ты пишешь, что уехал из Шепетовки с семьей в казатинское депо.
32. Но веднага схвана нашите работи, макар че не е свършил гимназия. (p.165),
(□) Но в нашем деле разобрался сразу, хотя гимназию не кончил.
33. Измитай се оттука, додето не съм не надупчил. (p.214),
(□) Смывайся отсюда, пока я тебе компостер не поставил.
34. Ако вие сте организирали фракция мнозинството, и ние имаме право да организираме фракция на малцинството! (p.361), (□) Если вы организовали фракцию большинства, то мы имеем право организовать меньшинства!
- Д. 35. Монтъорът не знаеше, че случаят при тунела е засегнал Цветаев по-дълбоко от другите. (p.315), (□) Монтер не знал, что Цветаева случай у туннеля коснулся острее других.
36. Дъжната на лентата, която те са изтракали от първия ден на сдужбата си, не надминава двадесет километра. (p.367), (□) Длина ленты, откутанной ими с первого дня службы, не превышает двадцати километров.
- Е. 37. Както се вижда, стултът е пронизал "пана" до черния дроб. (p.320),
(□) Видать, мороз "пана" пронял до печенки.
38. Тя очевидно е разиравила за мен, разбира се, прехвалила ме е. (p.199),

(□) Она ему, видно, рассказала обо мне, конечно перехвалила.

F. 39. Мислех си, че тия са се докопали до нещо. (p.237),

(□) Мне показалось, что эти докопались до чего-нибудь.

G. 40. Тю, взел го дявол. (p.174), (□) Тъфу, черт!

以上の観察を通じて、特に顕著なことは次の諸点であろう。

(1)不完了体対完了体の比率は1対2.5である。完了体の出現率が高い。

(2) (一般的・具体的) 事実の確認・伝達の意味の頻度が高い。マースロフのパーフェクトの意義の大分類、すなわち前述の①～③が含まれるが、本稿の段階では細かい意義の分類は行わなかった。当然、「現在」との何らかの繋がりを以て語られるものである。

(3)不完了体の意味で顕著なのは、「過去」から「現在」に至る継続行為の意であり、直接話法・不完了体の中で見るだけでも、かなりの出現率である。特に、次のような語句と共によく現れている。

в живота, цял живот, през живота, две години, няколко години, двайсет години, отдавна, всякога, досега, никога, винаги, толкова време, колко пъти неведнъж 等

(4)不完了体、完了体ともに従属文の種類の中でも、補語的従属文に用いられるものの比重が高い。

特に所謂 Verbum dicendi ないしは глагол за идеална дейност を主文に置く補語的従属文において顕著である。да 構文中 (конюнктив) 中にも多い。主文に用いられた動詞および動詞形として、次のものが目立っている。

казвай, кажи, каза, кажеш, казваш, казват, каже, знам, знае, знаеш, знаеш, разказа, узна, признал, видя, виждам, разбирам, се струваше, слушаше, пишеш, повторят, измисля, значи 等

(5)当然ながら、直接話法における出現率が高く (内言もこれに加えた)、物語文の約2.7～2.8倍の割合で現れる。対話文でパーフェクトがよく使われるのは、パーフェクト一般の傾向であり、この点ではブルガリア語も例外ではない。しかし、それが、アオリストやインパーフェクトに取って代るような傾向は示していない。

[結語]

ガルシコーヴァ、ハブルガーエフは、「対話においては、80-90%を下ることがない圧倒的多数の場合、過去に対する態度は、現在に対する直接的関心と繋がっている」、したがって、「対話では常にパーフェクト的表現の必要性が強まり」、「そのために古いスラヴの他の時制形と比べて、パーフェクトが最大の生命力を維持して来たのであり、特にこの意味は完了体において著しい」と述べている³⁷⁾。自己の依って立つ現在を常に意識の中に潜在させているのは日常的な言葉使いの態度である。

ブルガリア語についても、独立した、すなわち、非連続的な事件についての描出には、いろいろ

な点で「現在」との繋がりを指示するパーフェクトが用いられる、とマースロフは述べているが、「現在」との繋がりが「闇の中に」ある場合、あるいは話者が言及している事件について証人的立場を強調する場合にはアオリストを用いる、という。この場合のアオリストかパーフェクトかの選択は話者の主観、話者のその時点での意識に依る所が大である、という、ブルガリア語パーフェクトには、伝聞法との関連で、非証人的な伝聞による事件の伝達ニュアンスが含まれるのである⁽³⁸⁾。この事も、対アオリストとの関係でパーフェクトが変質を起さない原因の一つであろう。逆にこうしたアオリストの方も、対パーフェクトの点で存在意義を有しているのである。

一方、連続的物語文でパーフェクトが現れるのは①語りの現在（нарративное настоящее）に対する先行性を表出する場合、② Verbum dicendi 等に従属する文において、また③純粋な語り、作者解説文等からの様々な逸脱の場合、に顕著である、という⁽³⁹⁾。

対話文におけるパーフェクト使用が、対話が常に置かれる心理において当然のことだとすれば、物語文、解説文におけるパーフェクト使用の動機が説明されることこそが、ブルガリア語動詞組織の解明に繋がって行くであろう、と考えられる。

一千年を経てなおかつ過去時制の内的関係を変えることなく、同じ均衡状態を保ち続けている理由は何なのか。直接法パーフェクトと3人称を除いてオモーニムである伝聞法アオリストが存在するが、伝聞法からだけの影響は、上記の点で考えられるとしても、疑念が残る。プーニナも、ブルガリア語時制組織の旧守性についての問いには慎重であって、決してこれに対して答えてはいない。唯次のように述べている。すなわち、「パーフェクトを、口語により特有の過去形と見なす研究者がいるが、これはスラヴ語発展のより遅い時期に対してだけ、古い時制組織から新しい三時制組織への交替が見られるスラヴ語についてのみ正しい。しかし、古スラヴ語もブルガリア語も、アオリストとパーフェクトは峻別されており、文語対口語という様な対置関係はなく、アオリストは、直接話法であっても、決してパーフェクトに劣らず、むしろ頻繁にさえ現れるのである。口語であれ、文語であれ、パーフェクトの使用の動機は同じであり、それは現在期間に繋がる過去を表わす、ということにすぎない。したがって、この観点からすれば、作者の語りの言葉も、直接的な返答を前提にしない一種の直接話法である」と⁽⁴⁰⁾。また、ブルガリア語時制の研究者達の間に、パーフェクトによるアオリスト駆逐とパーフェクトの意義範囲の拡大についてのプロセスを何段階に分け、アオリストの中の周辺的な意義、例えば futurum exactum の意義からアオリストの崩壊過程が始まった、というような立論を行うものがあるが、こうした結論には極めて綿密な検証が必要である、としている⁽⁴¹⁾。

筆者も「鋼鉄」のパーフェクトの検索によって期待したすべてを得た訳ではないが、ブルガリア語パーフェクトの、従属文中での、特に補語的従属文、それも verbum dicendi 等を主文に置く従文での使用頻度の高さに驚くのである。ブルガリア語では、このグループの動詞を使う時には、主文が現在、未来の時も、過去の時も、主文に対する先行性を表わす時には、原則として、すべてパーフェクトを使うことになっている（勿論、主文が過去の場合にブルパーフェクトを使うこともあり、

またアオリストや稀にインパーフェクトも登場する)⁽¹²⁾。この事は、ブーニナによるブルガリア語パーフェクトの定義を想起させる。ブーニナの定義の基礎は、相対時制の中で位置づけたことであり、それは常に作中現在に先行する行為の表現、という職能であった。行為の時間的、論理的関係に対する意識と関心が主、従文の関係におけるパーフェクトの配置に顕現して来る、と考えられる。これをタクシス性と呼ぶならば、タクシス性に対する意識がロシア語等より強い、と判断される。文法範疇としてのアスペクトをもたない言語も、それをもつスラヴ語も、同じようにパーフェクトを単純過去化するものであるから、文法範疇としてのアスペクトの有無はパーフェクトの変質とは直接的な繋がりをもたない、と考える。したがって、ブルガリア語パーフェクトは、アスペクト性よりもむしろタクシス性を強く指示する有標項としての任務をもつが故に、他のスラヴと同じく文法範疇としてのアスペクトをもち乍らも、それによってこの任務を代替できない。アスペクトの操作によって間接的にその任務を遂行するロシア語とは異なるのである。ロシア語のアスペクトは副次的な任務として、タクシス性を表出するが、それは、このタクシス性の機能を有標項として支えているのではないのである。タクシス性の機能はどのような言語においても、それなりに表出することは可能であるが、ブルガリア語はこの機能を強く気につけ、意識する言語なのである。ブルガリア語のパーフェクトは、アスペクト性よりも、むしろタクシス性の機能に傾いており、その事がアオリストとの峻別を意識させ、パーフェクトのアオリスト化を押しとどめている、と考えられる。そのことが今度はまた時制組織全体の複雑性、旧守性を支えているのではなかろうか。そして一方では、伝聞法とも相関性をもちながら、誰の話が、どこから、どういう順序で伝わって来るか、その行為間の前後関係は何か、という意識が、常に心中に強く沈殿している言語だと考えられるのである。

[注]

- (1) Ю. С. Маслов, Очерки по аспектологии, Л., Из-во Лен. унив. 1984, стр. 32-47
- (2) R. Jakobson, Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb (in "Russian and Slavic Grammar Studies", Mouton Pub., Berlin-New York-Amsterdam, 1984, p.46)
ヤーコブソンによって初めて提起された用語で、同論文では次のように定義されている。"Taxis characterizes the narrated event in relation to another narrated event and without reference to the speech event." すなわち、ヤーコブソンは、relative tense という用語よりはブルームフィールド (Bloomfield) の用語 order に相当するものだとしている。従って、タクシスとは、この場合、行為相互間の時序的相関性 (同時性—先行性—順次性) とか、行為相互間の論理的関係などを指したものである。
- (3) O. イェスベルセン著、半田一郎訳、「文法の原理」、岩波書店、1967, p.383
- (4) 同上, p.387, I have known him for two years.
- (5) A. Leskin, Handbuch der altkirchen slavischen Sprache, Heidelberg, 1962, Carl Winter, Universitätsverlag, S.122, 163-164
- (6) O. イェスベルセン, 同著, p.383
- (7) 三好助三郎著, 新独英比較文法, 郁文堂, 1985, p.138-139.
- (8) 日本における、ロシア語を含むスラヴ語の文法用語では、通常、分詞 (Participle) は「形動詞」と呼ばれる。従って、能

動完了分詞は「能動形動詞過去」である。木村彰一著「古代教会スラヴ語文法」(白水社, 1985)では,「能動過去分詞」とされる。

- (9) ロシア方言では, この語法は盛んである。この場合, у кого は実際の行為主体を現しており, У вас этот шкаф недавно куплен. は, Вы недавно купили этот шкаф. を表すのである。これについては, Маслов, Очерки по аспектологии ([注] 1.) p.239-242 に詳しい。

- (10) П. С. Кузнецов, Очерки по морфологии праславянского языка, М., Из-во АН СССР, 1961' стр.103, 122

- (11) (例) би-ти (打つ) のアオリスト, (sg)bi-s-o-m > bihun > бихъ. bi-s-s > bis > би, bi-s-t > би; (pl)bis-o-mos > bihomus > бихомъ. bi-s-te > бисте, bi-s-nt > bih'nt > биѣт > бишѣ

- (12) セルボ・クロアチア語, (例) nosi-ti(носи-ти) (運ぶ) のアオリスト, (sg)nosi-h, nosi, nosi; (pl)nosi-smo, nosi-ste, nosi-se (h-s-š の交替)。ブルガリア語, (例) гледам (見る) のアオリスト, (sg) гледа-х, гледа, гледа; (pl) гледа-хме, гледа-хте, гледа-ха (-х-のみ)

- (13) Г. А. Хабургаев, Старославянский язык, М., Просвещение, 1974, стр.279
(第二版, 1986, стр.200)

П.С. Кузнецов Очерки の同著 (注10) では, スラヴ諸語インパーフェクトの形態について「大部分の研究者たちは, 形態的には異なる二つの形の合成した形だと考えており,それがスラヴ祖語の崩壊以前の, 恐らくその発展初期に一つに統合されたものであり, それは, ラテン語インパーフェクト amabam タイプに似る, と考えている」としている。

- (14) М. В. Горшкова, П. А. Хабургаев, Историческая грамматика русского языка, М., Высш. шк. стр.330

- (15) В. И. Борковский, П. С. Кузнецов, Историческая грмматика русского языка, М., Наука, 1965, стр.292

- (16) П. С. Кузнецов, Очерки исторической морфологии русского языка, М., Из-во АН ссср, 1959, стр. 215

- (17) В. И. Борковский, П. С. Кузнецов, Ист. гр...., там же, стр.292-295

- (18) М. В. Горшкова, П. А. Хабургаев, Ист. гр...., там жт, стр.337-338

モスクワは13世紀までは, スズタリ国の首都ウラヂーミルに属して大公の支配を受けた地である。

- (19) 現代スラヴ諸語のパーフェクト及びそれが過去一般に変わったものの形式は, 概ね次の通りである。

- ・ (ポーランド語) nieść (運ぶ)

単 数	1. niosł-e-m (男性), a-m- (女性)	複 数	niosł-i-śmy (男性人間), ł-y-śmy (男性人間以外)
	2. -e-ś -a-ś		ł-i-ście ł-y-ście
	3. niosł (男性), -a (女性), -o (中性)		niosł-i , ły

これは, 存在動詞 być の現在形活用語尾 (jestem, jesteś, jest : jesteśmy, jesteście, są) に -ł/-ł- 分詞をつけたものである。ただし, 3 人称では存在動詞を省略する。また, この語尾形態素は可動的であり, 動詞以外の他の語にも飛ぶ。

Cóż czytaliście? Cóżście czytali? (貴方達は一体何を読んでいたのか)

- ・ (チェコ語) nest(i) (運ぶ)

byť(i) (存在動詞) の現在活用形 (jsem, jsi, je : jsme, jste, jsou)の内, 3 人称を除いて次の -l- 分詞と合成する。(sg)nes-l(m), -l-a(f), -l-o(n); (pl)-l-i (活動体), -ly (不活動体), -ly(f), -l-a(n), (例) nesl jsem...

- ・ (スロヴァキア語) niest' (運ぶ)

byť' (存在動詞) 現在活用形 (som, si, je : sme, ste, su) を 3 人称を除いて -l- 分詞と合成する。nieso-l(m), -l-a(f), -l-o(n), -l-i(pl)

- ・ (ソルブ語) njesc (運ぶ)

sg	1. sym nesł(m), -a(f), -o(n)	d	smej niestoj	pl	smy njesli (人間男性), te(それ以外)
	2. sy		staj/stej		śće
	3. je		staj/stej		su

双数を有する。

複数においては, 現代語はすでに -li 語尾をあらゆる場合に使用する傾向がある。

- ・ (セルボ・クロアチア語) nositi (運ぶ)

biti (存在動詞) 現在活用形(sg)sam, si, je; (pl)smo, ste, su と

-l- 分詞(sg)nosi-o(m), -la(f), -lo(n); (pl)-li(m), -le(f), la(n) を合成する。

- ・ (スロヴェニア語) delati (する, 作る, 働く)

biti (存在動詞) 現在活用形(sg)sem, si, je; (d)sva, sta, sta; (pl)smo, ste, so と -l- 分詞(sg) dela-l(m), -la(f), -lo(n); (d)-la(m), -li(n,f); (pl)-li(m)-la(n), -le(f) を合成する。双数を有する。

- (マケドニア語) бера (走る／3 単数現在)

-л- 分詞に存在動詞 (e/3 単数現在) (sg)сум, си, е; (pl)сме, сте, се を合成するが, 3 人称は存在動詞を省く。бегал(m), -ла(f), -ло(n); -ле(pl)。但し, この他に, 所有動詞(има)に受動分詞(-но/-то)を合成する別形を有する。

- (ブルガリア語) напиша (書く／1 単数現在)

-л- 分詞に存在動詞(sg)съм, си, е; (pl) сме, сте, са を合成する。

написал(m), ла(f), -ло(n); -ли(pl)

(20) [注] 8 を参照。

(21) イェスベルセン, 同著, p.395

(22) Ю. С. Маслов, Очерки ..., стр. 189-208

(23) イェスベルセン, 同著, p.362

(24) И. К. Бунина, История глагольных времен в болгарском языке, М. Наука, 1970, стр. 25-40

(25) 月刊「言語」1976年12月号, 川本茂雄, フランス語の時間表現の基底, p.41-49

(26) И. К. Бунина, там же, стр. 158

(27) И. К. Бунина, там же, стр. 123

(28) И. К. Бунина, там же, стр. 167-297

(29) 比較の為に用いたロシア語版は次のものである。

Как закалялась сталь, М. Гос. изд. Детс. лит., 1963

(30) И. К. Бунина, там же, стр. 120-121

И. К. Бунина, Система времен старославянского языка, М., Наука, Из. АН СССР, 1959, стр. 55

(31) И. К. Бунина, История ..., там же, стр. 118

(32) И. К. Бунина, История ..., там же, стр. 119

(33) И. К. Бунина, Система ..., там же, стр. 75-76

(34) И. К. Бунина, История, ..., там же, стр. 119

(35) И. К. Бунина, Система, ..., там же, стр. 75

(36) Ю. С. Маслов, Грамматика болгарского языка, М., Выс. шк. 1981, стр. 253

Грамматика на болгарския език, София, Наука и изкуство, 1982, стр. 259

Очерки болгарской грамматики, М., Из. лит. на ин. яз., 1956, стр. 237

(37) К.В. Горшкова, Г.А. Хабургаев, там же, стр. 326

(38) Ю. С. Маслов, Грамматика ..., там же, стр. 263-264 Грамматика ..., стр. 268-269

(39) Ю. О. Маслов, Грамматика ..., там же, стр. 263-264 Грамматика ..., стр. 268-269

(40) И. К. Бунина, Система ..., там же, стр. 78

(41) И. К. Бунина, История там же, стр. 122

(42) Ю. С. Маслов, Грамматика ..., там же, стр. 262-263

Грамматика ..., там же, стр. 267-268

〔参考文献〕 (上記以外で, 現代スラヴ諸語の記述等に用いた主な文献)

- (1) Славянские языки, Из-во Мос. Ун., 1977 (под ред. А.Г. Широковой и В. П. Гудкова)
- (2) R.G.A. de Bray, Guide to the Slavonic Languages, Part 1~3. Sl. Pub. Inc. 1980
- (3) А. М. Селищев, Славянское языкознание, М., Учпедгиз, 1941
- (4) A. Meillet, Linguistique historique et linguistique générale, Paris, 1965

- (5) Т.С. Тихомирова, Польский язык, М., Изд. Мос. ун. 1978
- (6) А. Широкова, Очерк грамматики чешского языка, М., Изд. лит. на иностр. яз.
- (7) Josef Zubaty, České sloveso, Praha, Akademia, 1980
- (8) В. П. Гудков, Сервохорватский язык, М., Изд. Мос. ун., 1969
- (9) М.Г. Букахов, М. А. Жовтобрюх, В. И. Кодухов, Восточнославянские языки, М., Пр-св., 1987
- (10) Т.П. Ломтев, Грамматика белорусского языка, М., Учпедгиз, 1956
- (11) Т.П. Ломтев, Сравнительно-историческая грамматика восточнославянских языков, М., Высш. школа, 1961
- (12) Eugen Pauliny, Kratka gramatika slovenska, Bratislava, Slov. pedagog. nakl.-vo, 1982
(Э. Паулини, Краткая грамматика словацкого языка, М., высш. школа. 1982)
- (13) М.И. Ермакова, Очерк грамматики верхнелужицкого языка, М., Наука, 1973
- (14) F. Medushevsky, R. Zyatkovska, Ukrainian Grammar, Kiev, Radianska shkola, 1963
(А.П. Мелушевский, Р.Г. Зятковська, Грамматика української мови, К., Р. ш, 1963)
- (15) Мария Деянова, История на сложните минали времена в български, сърбохърватски и словенски език, София, Издателство на Българската академия на науките, 1970
- (16) Радослав Мутафчиев, Сегашно историческо време в съвременния български език, София, Изд-во Българската академия на науките, 1964